

初年次文章表現科目におけるオンライン授業の試み (2)

—2020年度後期「日本語表現T2」の実践と課題—

外山敦子・小林珠子・近藤さやか・辻本桜子・松原久子・松本明日香
TOYAMA Atsuko, KOBAYASHI Tamako, KONDO Sayaka,
TSUJIMOTO Sakurako, MATSUBARA Hisako, MATSUMOTO Asuka

1. はじめに

愛知淑徳大学では、大学での学修に必要なライティングスキル習得を目的とした全学共通履修科目「日本語表現 T2」(1 年後期開講/学科専攻ごとに必修または選択/2 単位、以下「本科目」とする)を開講している。本科目は、受講者数 1,300 人(過去 5 年間実績の平均/単位未修得クラスを除く)を 53 クラスに分け、稿者ら専任教員 6 人と非常勤講師 2 人の計 8 人が、共通シラバスに基づき同一内容・同一評価で授業を行っている。

本科目では、前提科目である「日本語表現 T1」(1 年前期開講/全学部必修/2 単位、以下「T1」とする)^(注1)における学修内容をふまえて、資料の検索と収集、資料の批判的読解、プレゼンテーション(PPT 作成)、レポート作成という、一連のアカデミックスキルの基礎を実践的に学ぶ。

2020 年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、本学でも多くの科目がオンライン授業に移行することになり、「T1」に続き^(注2)、本科目もオンライン

での開講が決まった。本稿では、2020 年度「日本語表現 T2」のオンライン授業の実践と課題について、特に 2019 年度以前の教室授業のそれと比較しながら報告する。

2. オンライン授業への移行

2-1. 開講の形態

前期と同様、無理のない確実な方法で開講することを最優先とし、教員が事前に用意した講義(資料や動画)を配信し、指定の期間内に学生が閲覧・視聴して課題を提出するという「オンデマンド型」を採用した。

授業担当者間で統一したのは、①各回の講義と提出課題の内容、②課題の配点と評価基準、③課題へのフィードバックの実施、④講義および課題を「Microsoft Teams」から配信すること、の 4 点とした。④は後期の本科目で追加した事項である。Teams を使用することで、課題の個別フィードバックが前期よりも簡便に行えるようになった。各回の講義資料や動画の作成は、前

表 1 全学共通履修科目「日本語表現 T2」授業計画 (2019 年度・2020 年度比較)

2019年度	2020年度
1. オリエンテーション	1. オリエンテーション
2. 資料を収集する	2. テーマを掘り下げる
3. 資料を使って概要をつかむ	3. 問いを立てる
4. アウトラインを考える	4. 資料を収集する
5. 中間報告をする	5. 資料を正確に読む
6. 発表資料を作成する	6. 資料を批判的に読む
7. 文献を批判的に読む	7. レポートのイメージをつかむ
8. グループ発表をする (1)	8. アウトラインを作成する
9. グループ発表をする (2)	9. 引用の目的と方法を理解する (1)
10. グループ発表をする (3)	10. 引用の目的と方法を理解する (2)
11. グループ発表をする (4)	11. レポートを作成する
12. レポートの書き方を学ぶ (1)	12. 研究発表のスライドを作成する
13. レポートの書き方を学ぶ (2)	13. 研究発表の口述説明を工夫する
14. レポートを推敲する	14. レポートを推敲する
15. 授業のまとめ	15. 授業のまとめ

期開講の「T1」に引き続き、各授業担当者の裁量とした。また、授業担当者間の情報交換にも、引き続き Teams を用いた。

2-2. 授業計画の変更

平時は、学生は4名程度のグループを組み、関連文献を集めて読み込み、Power Point で資料を作成して発表を行う。その後、発表内容を個人がレポートにまとめるという授業展開で、半期15回のうち4回をグループ発表に充てていた。今期は開講形態がオンデマンド型になったためグループ発表をやめ、代わりにレポート作成の手順を細分化して、論点の見つけ方（第2回）や目標規定文の立て方（第3回）、引用の目的と方法の理解（第9回・10回）などに注力し、通常よりも時間をかけて学ぶ授業計画に変更した（→表1）。

レポートのテーマは「子どものスマートフォン利用がもたらす功罪およびその解決策について、問題となる背景や実態を明らかにし、考察の対象や論点を絞った上で自分の考えを述べよ。なお、解決策の提示は実現可能性を考慮し、かつオリジナリティを明確にすること。」とし、第1回のオリエンテーションで告知した。あわせて、①字数制限2,000字、②序論に目標規定文を示す、③引用文献を5点以上、④引用文献を批判的に検証する、などの作成条件を提示している。

3. 履修登録の傾向

本学には19学科専攻が設置されている。本科目は、このうち文学部3学科、創造表現学部3専攻を含む8学科専攻が「必修」（以下、必修クラス）、残りの11学科専攻は「選択」（以下、選択クラス）である。本章では、このうち選択クラスに属する学生の履修登録の動向を、前年度の数字と比較して報告する。

まず、選択クラスの履修者数は前年度が506人、本年度が203人であり、大幅に減少した。具体的には、前年度は多くの学生が本科目を履修していたスポーツ・健康医科学科（58%→19%）、交流文化学科2専攻（ランゲージ専攻で44%→13%、国際交流・観光専攻で76%→18%）、現代ビジネス学科（60%→14%）の4つの学科専攻における履修率が、本年度では10%台に留まった。その他の学部においても、全体的に履修率は減少傾向にあった。本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、前期は実習系の講義や実技を伴う講義の閉講が多く見られた。そのため、自身の所属学科専攻の専門科目を優先的に履修し、全学共通履修科目である本科目の履修を見送った学生が増加した可能性がある。特に、必修の専門科目が多い学部においてその傾向が強く見られた。

一方で、前年度において履修率が在籍者の5%以下

だった4学科専攻のうち、福祉貢献学科2専攻で、履修率が10%台に上昇していた（社会福祉専攻で4%→15%、子ども福祉専攻で2%→11%）。本科目は、長文レポートを執筆するスキルを基礎から学ぶことができる授業計画となっている。本年度は、オンラインで開講される講義が増えたことから、テスト形式ではなくレポート形式で評価が実施される講義が増加した。他の科目のレポート課題への応用が可能であるという観点から、特定の学科専攻で履修の意義を例年と比較し強く感じた学生が増え、履修率が上昇したと考えられる。

4. 受講生の取り組み

4-1. 発表+レポート（4000字）からレポートを主とした活動へ

平時において、学生はグループ発表を中心として行い、その後は発表内容をふまえて個人によるレポート執筆に取り組む。発表は主に第8回から11回にわたって行われ、発表後の質疑応答や教員からの指摘をふまえてレポート執筆へと移行する。そして、第12回から14回にかけてレポート作成に関する講義が行われる。口頭発表を準備し、発表後はそれをレポートにまとめるのが、平時の取り組み手順となる。

一方、今期はオンデマンド型講義で開講したために、グループによる活動や口頭発表などは行わず、受講生はレポート作成を主軸として授業に臨んだ。第2回から11回、14回が主にレポートに関わる学修にあたる。なお、スライド作成・口頭発表については第12回、13回を通して学修した。今期はレポート作成を基礎から実践的に学びつつ、発表の方法を併せて身につけるという手順をとった。

4-2. 主な取り組み

4-2-1. レポートテーマの設定

平時は、グループ発表およびレポートのテーマは複数提示^(注3)されたなかから一つを選択するというものであった。「(テーマ)をめぐる議論の批判的検討」を共通の表題とし、サブタイトルは自由とした。どのテーマも社会的な問題を扱っており、専門性が高いため、キーワードの意味や前提となる知識の確認は必要不可欠となる。同時に、専門性の高いテーマを取り上げるにあたって、専門知識がない読者（聴衆）にどう伝えるかという点も重要となっている。

今期は「子どものスマートフォン利用がもたらす功罪およびその解決策」をテーマとしたため、学生にとってもなじみのある話題であった。そのため、学生はもともと備えている基礎知識を前提に調査の対象を絞り、各々で「功罪」の中身を定めたいうえでレポート作成に臨んだ。学生ごとに、学力の低下や向上、犯罪被害やその防止に

ついて、あるいは、コミュニケーション能力の低下や向上など、スマートフォンの利用に関わる様々な問題に着目してレポート執筆に取り組んだ。なお、最も多かったのが学力に関する話題で、これはスマートフォンの利用と学力との関係について取り上げた文献が多かったためだと考えられる。

4-2-2. 資料収集・精読

発表・レポート作成において、資料収集は欠かすことのできない取り組みの一つである。平時には、グループで資料収集（第2回）を分担したうえで、資料の精読・論点整理（第3回）を行う。複数の検索サイト^(注4)を用い、グループごとに担当者を決めて資料収集を行った。収集した資料をグループ内で分担して精読し、論点整理を行うこととなる。個々の学生に役割が割り振られることで、複数の資料を効率的に収集・精読できる一方、担当でない検索サイトに触れることなく課題を終えたり、特定の資料に目を通さないまま発表に臨んだりする学生も少なからずいた。

今期はテーマに関して論点整理（第2回）を行い、資料収集（第4回）、資料の精読（第5回）を個人で取り組んだ。平時とは異なり、各自がすべての検索サイトを活用することを前提としており、学生は収集した資料全てに自ら目を通すこととなる。平時はグループの一員として、レポート作成に必要な全工程のうち、その一部を担えば済んでいたところ、今期はすべての作業を一人でやねばならなかった。そのために、学生自身の学修活動がすべて各自のレポートの評価に直結することとなった。

4-2-3. 発表・レポート執筆・推敲

平時において授業の中心であったグループ発表（第8～11回）では、学生が口頭発表を行った後に、学生同士による質疑応答を行った。学生はピアレビューを通して他者の目を意識した資料づくりや発表姿勢を学ぶこととなる。また、レポート執筆においても、学生同士による相互添削（第14回）を通して、自身のレポートを他者の視点に立って推敲する力を伸ばした。以上のようなピアラーニングによる気づきを中心とした学修こそ、平時における本科目の主たる取り組みであった。

一方の今期では、学生は個人による情報整理を通して課題を見つけ（第2回）、目標規定文を設定（第3回）したうえで、レポート執筆に臨んだ。また、オンデマンド型授業であることから、ピアワークの機会を設けることが困難となったため、学生から寄せられたコメントを翌週の講義で紹介するなど、平時よりもフィードバックを丁寧に行った。他の学生がどのような意識で課題に取り組み、どのようなかたちで問題解決に至ったかなどを

提示することで、学生の気づきの助けとした。

4-3. 教員とのやりとり

今期は平時のようなピアラーニングの機会は得られなかったものの、その一方で教員に対する学生からの質問は多く、学修成果欄^(注5)を通したやりとりは平時よりも盛んに行われた。平時における学生と教員とのやりとりは机間巡視中の声掛けが中心であり、授業前後のやりとりや、学修成果欄における学生とのコメントのやりとりもそれに併せて行われた。

オンデマンド型授業においては、各課題の学修成果欄もしくはTeamsを通してのチャット、メールなどのやりとりが中心となった。会話とは異なり、文字によるやりとりでは質問等の繰り返しの煩を避けるため、ある程度考えをまとめたうえでコメントが寄せられた。的を射た質問や指摘も目を引いた。平時の学修成果欄では「しっかり頑張りたい」等の漠然として中身の無いコメントも散見された一方で、今期は具体的な記述が増え、課題の要所を衝いたコメントも多かった^(注6)。自ら考え、進んで質問する学生が多数であった。平時は相互研鑽を中心としていたものが、今期は個人研鑽が中心となり、相互研鑽にあたる部分を教員が補うかたちで授業が進行した。

5. 成績評価

成績は、最終レポート課題を含む、15回の課題の提出状況および課題の点数により評価した。なお、提出課題の評価、配点基準については「T1」同様に初回講義、各講義時に明示、説明した。

前年度、本年度の成績評価の内訳を、表2に示した。全履修者の成績評価に関して、前年度と本年度を比較した結果、以下のような傾向が見られた。全履修者の成績評価に関して、A+、Aといった高い評価の学生の比率が大きく減少していた。それに伴い、低評価であるCの割合も上昇していた。つまり、本年度は前年度と比べ、全体的に成績が低下したといえる。本科目は、オンデマンド型に授業形態を変更したことにより、本来ならば本科目の主体となるグループワークの実施が実現できなかった。篠崎（2015）は、文章表現指導の実践において、アクティブ・ラーニングの有用性を述べている。具体的には、講義内で学生同士が自由に、それぞれにとっての模範例となる文章の閲覧や、文章を作成する他者と交流することで、各自も躓きを解消しており、その結果、文章作成スキルが上昇した可能性を指摘している。本科目でも、前年度以前はグループワークが上記のような効果をもたらし、成績上昇に繋がっていたと予想される。本科目は「T1」の後続科目であり、様々な文献を検索し、読み込み、批判的に検討し学術的な文章を仕上げる、と

いった複数のスキルを必要とする。それに伴い、躓きを自覚する箇所も多いといえる。そのため、本科目を受講し課題に取り組むうえで、個別でその躓きに対応、克服し、好成績を収めることは難易度が高かったと予想される。

さらに、本年度は、単位不認定者の割合が前年度と比較し大きく増加した。藤田・山下・西川・石黒（2017）は、ピアワークを伴う講義が学生の文章作成に対する抵抗感を低減することを示している。しかし本年度はピアワークの実施ができず、文章作成に対して抵抗感のある学生は、それが解消されなかった可能性が高い。加えて、篠崎（2015）が指摘したような、グループワークによる躓きの解消も行うことができず、いたと考えられる。本年度の履修生のうち、特に文章作成を苦手とする学生は、抵抗感や躓きが解消されないうまま受講を終え、結果、単位不認定者が増加したことが予想される。ただし、「T1」同様、本科目においても前年度と授業計画が変更されたため同条件での比較にはなっておらず、結果の解釈には慎重になる必要がある。

表 2 基幹科目「日本語表現 T2」成績評価の内訳（全学）

	A+	A	B	C	F	失格
2019	8	38	33	16	3	2
2020	2	22	34	27	11	5

（数値は%）

6. 成果および課題

6-1. 成果

成果としては、以下の3点が挙げられる。1点目は、資料収集と精読が主体的にできていたことである。4-2-2で述べたように、平時には、学生は検索サイトごとに分担して資料収集を行っていた。そのため自分の担当以外の検索サイトには触れることなく、他の学生が収集した資料について精読が不十分な学生が見られた。しかし、本年度は資料収集から精読、レポートの構想、執筆まで一人で担わなければならなかったため、すべてにおいて当事者としての主体的な行動が必要となった。平時とは異なるこのような状況下において、検索時に用いるデバイスの事情、図書館へのアクセスの困難さなど様々な要因により、学生が収集した資料数自体は、平時より少ないものであった。しかし、学生は自ら収集した限られた資料をよく読み、理解したうえで、レポート執筆に臨むことができていた。

2点目は、一学期間を通して一つのテーマを追究し、最後にレポートを書き上げ提出することで、学生が達成感を得ていたことである。授業開始直後の学修成果欄には「これまでに2000字のレポートを書いたことがない」「書けるか心配だ」と不安を述べる学生が多数いた。し

かし、最終回（第15回）のアンケートでは、「毎週の講義で少しずつ段階を踏んでレポートを作成すれば書けるのだと分かった」「15回の講義を受ける中で、どんどんレポートが完成に近づいているのを感じた」という意見が多数見られた。この点については、オンデマンド型授業になっても例年通りの成果が得られたと言える。

3点目は、オンデマンド型授業ならではの成果として、学生が講義資料、動画を繰り返し閲覧し、参照していたことが挙げられる。最終回のアンケートでも、「過去の講義資料を何度も読み直し、より良いレポートが作成できるように頑張った」「いつも前回の講義資料と（今回の資料とを）合わせて見ていた」と述べる学生がおり、特に書誌情報の書き方と引用の書き方は繰り返し講義資料を参照した、と述べる学生が多かった。実際に最終提出されたレポートでは、引用文献リストを正確に作成している学生が多く見られた。

6-2. 課題

オンデマンド型授業特有の課題として、以下の3点が挙げられる。1点目は、最初の資料収集の段階で躓いた結果、レポート作成に支障が生じた、あるいは作成できなかった学生がいたことである。前述の通り、本授業では全15回の授業を通して段階的にレポート完成に向かう。そのため、最初の資料収集の段階で躓くと、後の工程に影響を及ぼす。平時であれば、資料収集はグループワークで行うため、検索方法に不安がある場合、学生同士相互扶助が行われるが、本年度はそれがなかったため、そこで躓いてしまうと軌道修正が困難であった。自らの不安や困難点を教員に連絡し尋ねたり、ライティングサポートデスクへ相談に行ったりする積極的な学生も見られたが、資料収集がうまくいかなかったまま、次のステップへ進めなかった学生がいたことは事実である。

2点目は、同じく資料収集時の課題として、使用された検索サイトに偏りが見られたことが挙げられる。具体的には、図書館OPACを利用して検索し、図書を参照した学生が非常に少なかったことである。学生が収集した資料はほとんどがWeb上で入手されたものであった。本科目ではレポート作成の流れとして、「テーマの概要を調べる」「先行研究を調べる」「主張を裏づける資料を調べる」と、3段階で情報を検索し、資料の活用をするよう指導している。図書館OPACを利用して図書の収集、閲覧をしなかった（できなかった）ことで、例えば、概説書の閲覧をせず、テーマの概要の把握が不十分なまま次のステップ（先行研究の収集、主張を裏づける資料の収集）に進んでいたこと等が課題として残った。

3点目は、平時において実施されていたパワーポイントスライドを用いてのグループ発表、そしてグループでのレポート推敲の機会がなかったことである。平時には

グループ発表をすることで、学生は他の学生と教員からのフィードバックを得ることができ、その後、レポート作成に取り掛かることができた。しかし、本年度はその機会がなかった。また、平時には執筆したレポート草稿についてピア・フィードバックを受ける機会があるが、本年度はその機会も失われた。つまり、自分の課題成果物が教員以外の他者の目に触れる機会がなかったのである。そこで、自分のレポートの構想、構成及び日本語表現の問題点に「気づき」が促されないまま、レポート執筆に臨んだ学生が多く、その結果、レポートの完成稿として草稿とまったく同じものを提出した学生もいた。このように、オンデマンド型授業には課題も山積しているが、次回またオンデマンド型授業をする機会があれば、一つずつ解決策を考えたい。

注

- 1 「T1」では、①事実を正確にかつ分かりやすく説明する力、②論理的に自分の意見を述べる力を身につけることに重点を置き、その実践としての小論文を計3本作成する（本誌「2020年度初年次教育部門〈全学日本語教育〉活動報告」の「1. 開講科目および開講状況」を参照）。
- 2 「T1」のオンライン授業の実践については、本誌「初年次文章表現科目におけるオンライン授業の試み（1）—2020年度前期「日本語表現 T1」の実践と課題—」を参照されたい。
- 3 一例として、2019年度におけるレポートテーマを挙げると、夫婦別姓の法制化や出生前診断、臓器移植法改正などがある。
- 4 本授業において学修する検索サイトは以下の通り。ジャパンナレッジ、本学図書館OPAC、CiNii Articles、ヨミダス歴史館・毎索など新聞検索データベース、Google など。本稿では便宜上、これらをまとめて検索サイトと称する。
- 5 各回の提出課題に併せて設けられている自由記述欄のこと。「本時の学修および上記課題を通して気づいたことを具体的に記述せよ」のように、各回の講義と課題をふまえて、学生の取り組みや課題を問うためのもの。
- 6 例えば資料の精読（第5回）に取り組んだ講義の学修成果欄では、スマホ依存と学力低下との影響関係に気づきつつ、同時に、両者を取り上げた場合には一貫性に欠けるレポートとなることを危惧する旨のコメントが複数寄せられた。問題の本質に気づきつつも、それをレポートに落とし込むときに生じる別の問題にも気づくことができていた。

参考文献

- 篠崎祐介（2015）「アクティブ・ラーニングによる文章表現指導の研究（大学初年次教育科目における実践を基にして）」『リメディアル教育研究』10（2）、42-52.
- 藤田里実・山下 香・西川真理子・石黒 太（2017）「アクティブラーニングを用いた文章表現教育の効果—文章作成と文章への接触に対する抵抗感の変化に着目して—」『流通科学大学高等教育推進センター紀要』2、37-48.

執筆分担：外山（1,2）、松本（3,5）、辻本・松原（4,6）